OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Flora Samuel, "Le Corbusier and the Architectural Promenade", Birkhäuser, 2010.
Author(s)	瀧本, 裕美子
Citation	年報人間科学. 2014, 35, p. 155-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Flora Samuel
Le Corbusier and the Architectural Promenade
Birkhäuser, 2010.

瀧本 裕美子

「建築的プロムナード」。それは近代建築家ル・コルビュジエが生み出した建築言語であり彼の建築の独自性を表す概念でもありながら、建築の構造や物質的特徴へ完全に還元することができないという性質を持つ。つまり、建築的プロムナードとは空間の「質」を追及するものであり、その空間を移動する人間へともたらされる感覚と切り離して論じることができないという性質を付与された装置であると言えよう。

この問題含みの「建築的プロムナード」の概念を、成立背景となった知識源のみならず、実際の建築作品においてどのように変化、発展していったかについて考察し、総合的に探る試みが本書ではなされている。

著者であるフローラ・サミュエルはイギリスのシェフィールド大学建築学科教授であり、また2010年には同研究科初の女性学科長となった。国際的に名の通ったコルビュジエ研究者であり、2007年に出版された*Le Corbusier in Detail*はその後日本語、中国語へ翻訳された[i)]。

まず本書の構成を概観し、その上で本書がコルビュジエ研究の流れの中で持つ独自性について論じたい。このことによって、本書の意義が明らかになるだろう。

建築的プロムナード――その研究背景

プロムナードとは一般的には屋外に設けられた散歩道、散策路のことを指す。コルビュジエは建築空間内外の移動を「建築的プロムナード」と呼び、形態や採光、壁の色彩などを巧みに変化させ配置する。このことによって人は建築空間をたどりながら様々な感覚を呼び起こされ、「えもいわれぬ空間（L'espace indicible）」を経験することができるとコルビュジエは考えていた。このように、空間の経験を演出する「建築的プロムナード」については従来コルビュジエ建築論の一要素として触れられる傾向にあり、中心テーマとしてコルビュジエの建築を捉え直した研究は少ない。また、サミュエルも指摘するように、コルビュジエの建築研究に金字塔を打ち立てた建築史家コーリン・ロウでさえ、視覚的要素に力点を置くあまり、触覚や他の感覚への影響は十全に考察できてはいない[ii)]。他の近代建築家と比べ、コルビュジエは「空間を経験する」ことに力点を置いていたのが、そんなコルビュジエの建築論に関してでさえ、身体感覚と実際の建築の連関について未だ十分な研究がなされていないという。このような背景の中で取り組まれたのが本書である。

本書の構成

２部構成である本書の第１部では、コルビュジエが空間を経験する喜びへと人々を導くために用いた技巧について探求がなされている。

第１部は３章から成り、第２部で取り組まれる個別の建築における建築的プロムナードの考察を下支えする概念、およびコルビュジエによって用いられた技巧の紹介と考察に割かれている。興味深いのは、紹介されるエピソードや概念が「建築」の領域を遥かに越え出て、映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインとの交友関係、コルビュジエが傾倒していたガルガンチュアとパンダグリュエルといった文学作品にまで及ぶことである。このように、時には象徴主義的な世界観を持つコルビュジエの建築思想を積極的に彼の建築作品とリンクさせる、あるいは建築作品へと読み込むというアプローチは、他のコルビュジエ研究とは一線を画すものであり、彼女の独自性が現れていると言えよう。

コルビュジエが建築に劣らず関心を向けていたのは身体である。建築が身体からの反応、あるいは「より高次の」感情を引き起こすためにはどうすればよいか。身体のリズム、音楽、光、色といったトピックについてコルビュジエが思考を巡らせていたことが、第１章「諸感覚の同期化」で説明される。特に、確率論を用いた作曲で知られる現代音楽家イアニス・クセナキスとの関わりから、プロムナードにおいて展開される経験を音楽符における一連の出来事とリズムとして考えることができるとサミュエルは指摘する。

第２章においては、コルビュジエが様々な建築の形態を用いて、空間と時間というより大きな概念に対してアプローチしたことが論じられる。例えば、コルビュジエは初期の著作『建築をめざして』において、パルテノン神殿の柱廊と並列して、飛行機や自動車の形状が空気抵抗との関係の中で進化していくことを示す図を掲載する。このことについて、サミュエルはコーリン・ロウの議論を引き継ぎながら、特定の形態が空間の「流れ」を作り出すこと、さらに光や色彩、素材の操作によって生み出される空間の密度が人の運動性を大きく左右することについて、コルビュジエが敏感に察知していたと述べる。また、瞬時には経験され得ない形態としてジグザクの道や迷路がくり返し試案されていたことを取り上げ、形態から時間を組織化する方法を模索していたと指摘する。

第３章はサミュエルの独自性が最も際立つ章である。鍵となるのは、コルビュジエが用いた二つの秩序、すなわちレトリックによってもたらされる統合という秩序と宗教的教義によってもたらされる神秘的秩序の混合である。サミュエル自身も認めるように、コルビュジエがレトリックについて言及あるいは参照した形跡はない。しかし、コルビュジエが自らの主張や空間を構成する仕方はアリストテレスの修辞学、あるいはそれに影響を受けた19世紀ドイツの作家グスタフ・フライタークの物語構造[iii]に似通っていること、さらにこのフライタークの理論は映画論へ応用されたことから、サミュエルはこれらの構造をコルビュジエの建築解釈に有用なツールとして積極的に取り入れる。もう一方の秩序を考案するにあたって大きな影響を与えたとされるのが、オルフェウス、マグダラのマリア、ガルガンチュアとパンタグリュエル物語の構造である。コルビュジエの二元論的思考や数字を神秘主義的に扱う姿勢はオルフィスムへの傾倒としてこれまでも指摘されてきた。本書ではさらに、コルビュジエが好んで書き留めていた、ガルガンチュアとパンタグリュエルの第三の書の登場人物であるパニュルジュが解を求めて旅へと赴く部分が、まさにオル

フェウスの地下世界への旅と呼応しており、コルビュジエの秩序概念に混沌と闇の世界から変容、啓示そして秩序に至るイニシエーションの構造が存在することが強調されている。二つの秩序概念は理性的／宗教的という別の出自を持ちながらも「展開する物語構造」という共通項を有していることから、サミュエルはその密接な連関を主張するのである。

第２部では、第１部で紹介された様々な技巧がどのように実際の建築に用いられていたのかを指摘し、建築的プロムナードの発展を系譜的にたどっている。なお、建築の構造やヴォリュームといったコルビュジエ建築の大きな特徴よりも、むしろドアノブや窓枠、階段の手すりなどのディティールについて多くの紙面が割かれていることは、サミュエルの前書である*Le Corbusier in Detail*との連関が見られ、彼女の研究スタイルが一貫していることを印象づけている。

第４章では、建築的プロムナードを「ル・コルビュジエの物語の経路」として、「導入〈入り口〉」、「感覚化」、「問いかけ〈いかに住まうか〉」、「再方向付け」、「頂点」という五段階に分節化することが提示される。例えば再方向付けの要素としてスロープや階段が挙げられる。コルビュジエにとってこれらは上昇という運動を喚起させるだけでなく、垂直と水平が織りなす直角の関係を揺るがすものである。また階段の手すりを薄い鉄のフレームによる柵状にするなどの技巧は、空間と身体運動に緊張的関係を生み出し、そこに至るまでの建築経験に変化をもたらすためになされたのではないかとサミュエルは論じる。プロムナードに配置されたディティールが、身体に対して特定の反応を呼び起こすのである。五段階の要素をもとに、第５章から最終章である第７章までコルビュジエの建築的プロムナードの各特徴が描かれている。

第５章ではコルビュジエの前期作品であるラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸（1925)、サヴォワ邸（1931）の特徴を、薄暗い地下的空間から太陽の光の降り注ぐ空へとつなぐ「ヤコブの梯子」タイプのプロムナードだと指摘する。

第６章においてはコルビュジエが中期に手がけたジャウル邸（1955）などが取り上げられ、建築の内部空間でヴォリュームが重なり合うこと、それに沿って建築的プロムナードの各要素も徐々に区分しづらくなることが論じられている。

第７章においては後期に手がける建築がより複雑な物語構造を特徴として持つことが、織物工場であるクロード＆デュヴァル工場（1951）や、ブラジル学生会館（1959）ラ・トゥーレット教会（1960）の分析から主張される。空中へとのびる初期の明確なプロムナードはもはや見られず、ラ・トゥーレット教会に至っては、頂点に近づくにつれ光が減少し濃密な空間が現出してくるのである。

コルビュジエが初期に用いていた空間ゲームの手法は比較的単純なものであり、プロムナードの各要素を物語構造の諸段階に定置することに納得もできるだろう。しかし、後年技量の面でも知識の面でも成熟するにつれ、コルビュジエの建築はより巧妙に、平面からヴォリュームへと加重がかかっていった。特にヴォリュームの重なり合いによってプロムナードの解読が困難になっていくことが第２部を通じて説明された。

ここで詳述することはできないが、建築的プロムナードの各要素の考察において、その形態的特徴のみ

ならず用いられた色彩や素材の多様性、それらが空間と身体へもたらす効果についても詳細に言及されている。そのためコルビュジエの研究書としては有益な情報が十分につめられた一冊である一方、読解にはコルビュジエ、あるいは建築論一般への一定の知識が要求されると思われる。このことは多くの分野を複合して論じることの難しさが現れているとも言える。

空間について論じるということ――手法論の独自性と限界

本書で最も議論を引き起こすと思われるのは、彼女の独自手法である「建築的プロムナード」をフライタークに由来する五段階の物語構造で分析するという方法論であろう。この試みは斬新であり、間違いなくコルビュジエの建築論に新しい考察を加えたと同時に、分析概念およびそれを用いてなされる解釈の妥当性に問題を抱えている。

成功点として挙げられるのは、まず、これまで背景知識としてしか扱われてこなかった、コルビュジエが持っていた絵画・芸術論、映画論、そして文学作品等の建築以外の領域への関わりを建築作品の分析へ積極的に取り入れていることである。分析概念そのものが建築「外」からもたらされているため、建築の解釈に深みが増している。第二に、コルビュジエの建築にあらわれる「部分と全体」の一体化、そして後年になると顕著にあらわれてくる、「部分と全体」の非一体化、ずれについて考察することに成功している。従来の研究では、コルビュジエが部分と全体の一致を追及していたと示唆されてはいたものの、個別の要素を取り出して論じた途端、全体像からはみ出してしまうという困難を抱えていた[iv)]。対して本書はそもそもの分析概念が、一つ一つの段階が分節化されながらも一つの物語を構成する性質を持つため、建築的プロムナードの各要素に焦点を充てながらも最終的に一つの全体を構成することが可能となっている。このことは、建築的プロムナードの構成要素は別々に切り離して経験されるものではない、という実際の建築経験に即していると言えよう。この分析は同時に、コルビュジエの建築の変遷を、「部分と全体」の比較的単純な一体性から、微妙なずれを含む複雑性へという流れで把握することを示している点でも興味深い。

一方、この試みが批判されるとすれば、まず何よりも分析概念の妥当性であろう。確かに、コルビュジエはオルフィスムに深く傾倒していたことや、彼の著作中では明示されてはいないものの、ガルガンチュアとパンタグリュエルに影響を受けていたことはスケッチブック等の資料からも確認できるだろう。しかし同じモチーフや物語構造を建築へ導入したと結論づけるには直接的な根拠が乏しく飛躍がないとは言い切れない。建築家の象徴主義的側面については建築家の全体像を解釈する際に背景知識として触れられるとしても、建築そのものの解釈に持ち込まれることは、特に近代建築の研究において異質である。

またサミュエル自身、用いた手法の還元主義的性格を自己反省的に捉えているように、建築的プロムナードを構成する各要素を抽出し物語構造にあてはめられていたことは否めない。クロード＆デュヴァル工場ではプロムナードの「頂点」がオフィス階の会議室に設定されているのだが、その理由は、会議室が建物全体の最上階に位置しており、さらに工場における「頭脳」を司る場所であるためだという。しかし、建築的プロムナードが空間経験をねらったものであったという出発点に立ち戻るならば、この分析はもはやプロムナードから逸れてしまっているのではないだろうか。コルビュジエ自身建築が個人的に解釈され

ることを許容していたといっても、サミュエルが提出する論点や主張は、時に個人的な趣向にとどまっているという印象を与えてしまっている。

おわりに

しかし本書が挑んだ空間の記述方法には大きな意義がある。それは、コルビュジエが接していた建築以外の領域を含み込んで建築を見る眼差しが提供されていることである。大きく踏み込んで考えるならば、「近代」という時代に生み出された空間が持つ質が、決して均質なものではなく、配置やディティール操作による効果によって人間と関係づけられていたという視座を提供してくれていると言える。混沌の中から秩序を作り出し、そして人々が多様な質の空間を経験し感動するように、コルビュジエは思想的源泉を建築以外の領域からも積極的に取り入れていた。サミュエルの研究は、その重要性を一貫して主張し、コルビュジエの建築思想研究に新たな側面をもたらし続けるものとして高く評価されるだろう。

注

i） Flora Samuel, *Le Corbusier in Detail* (Oxford: Architectural Press, 2007).（フローラ・サミュエル『ディティールから探るル・コルビュジエの建築思想』、加藤道夫監訳、丸善株式会社、2009 年）

ii） Flora Samuel, *Le Corbusier and the Architectural Promenade* (Basel: Birkhauser, 2010), pp.48-49.

iii）フライターク『劇の技法（Die Technik des Dramas）』（1863）における演劇の五幕形式――1. 提示（introduction）、2. 上昇（developing）、3. 頂点（climax）、4. 下降または反転（return of fall）、5. 破局（catastrophe）――を取り上げている。（Ibid., 66.）

iv）フローラ・サミュエル自身、本書の中で「音やイメージのシークエンスを理解するための方法論を生み出そうとする挑戦を他の分野は行ってきた」と述べるように、建築分野では方法論自体が未だ確立していないと考えられる。（Ibid., 207.）

文献

Rowe, Colin. *The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays*. Cambridge MA: MIT, 1976.

Samuel, Flora. *Le Corbusier in Detail*. Oxford: Architectural Press, 2007.

———. *Le Corbusier and the Architectural Promenade*. Basel: Birkhäuser, 2010.